

Curriculum 2026年度開講科目 ※年度当初、変更となる場合があります。

卒業に必要な単位:124単位

専門教育科目:72単位
 全学共通科目:30単位
 広域選択:22単位
 必修:30単位
 選択必修:12単位
 選択:30単位

		1年次	2年次	3年次	4年次	
成長のプロセス		図書館の使い方やレポートの作成方法、歴史学の方法論や外国史の概要など、外国史専攻で学んでいく基礎を修得する。	幅広く多様な知識に加え、東洋史・西洋史の学問としての歴史学や研究法、史資料の扱い方の基礎を修得する。	研究の最先端を深く学ぶとともに、自らの力で史資料を調査し読解して、自らの言葉でその成果をレポートする。	専任教員のサポートのもと、研究テーマを設定して関連する史資料を徹底的に分析し、卒業論文を作成する。	
東洋史コース	必修	•東洋史概説 •西洋史概説	•東洋史学研究法	•東洋史学演習I	•東洋史学演習II •卒業論文	
	選択必修	•日本史概説	•日本考古学概説	•外国考古学概説	•史学概論 <small>この中から1科目を選択します。</small>	
西洋史コース	必修	•西洋史概説 •東洋史概説	•西洋史学研究法	•西洋史学演習I	•西洋史学演習II •卒業論文	
	選択必修	•日本史概説	•日本考古学概説	•外国考古学概説	•史学概論 <small>この中から1科目を選択します。</small>	
選択	•記録史料学I(古代・中世) •記録史料学II(近世) •記録史料学III(近代) •記録史料学IV(近現代)		•日本史史料講読I~V •日本古代史 •日本中世史 •日本近世史 •日本近代史 •日本古代史特講I-II(A/B) •日本中世史特講I-II(A/B) •日本近代史特講I-II(A/B) •日本近代史特講I-II(A/B)	•日本近現代史特講I(A/B) •考古学各説I~IV(A/B) •考古学特講I~X(A/B) •考古学史 •日本仏教史 •日本文化史 •日本現代史 •西洋文化史I-II •有職故実	•日本民俗学 •歴史地理学A/B •人文地理学概説 •地誌学 •哲学史 •仏教美術史 •西域美術史 •美術史概説 •ラテン語③	•ギリシャ語 •仏教史I-II •政治思想史I-II •社会経済史I-II •外国史特講I~VIII(A/B)(アジア) •外国史特講IX~XIV(A/B)(欧米) •外国史特講XV(A/B)(歴史一般) •外国史特講XVII(歴史一般)
			•日本史学史I-II	•古文書研究I-II		•史料調査実習

① 外国史学基礎演習

資料の宝庫である図書館見学にはじまり、文献の探し方、レポートの書き方、インターネットの活用方法、発表方法などを学びます。歴史学における基礎的な学習能力を身につけます。

② 外国史学文献史料講読I~XVII

歴史研究に欠かせないのが文献・史料の解読です。この授業では英語や漢文など外国語で記された文献を中心に、関連史料も取り上げ、文献の読み方を修得します。

③ ラテン語

ラテン語は、古典ギリシャ語とともにヨーロッパ文化の基礎を形成する要素です。本講義では主に基礎文法を取り上げ、平易なラテン文を理解できるよう展開していきます。

Message

教科書では触れられない時代のロシア史を深く学んだ、実りある4年間

小学校の頃から日本の戦国時代に興味があり、歴史に親しんできました。高校時代には歴史人物が登場するゲームを通じて外国史にも関心が広がり、次第に世界史全体に興味を持つようになりました。大学進学時には日本史と外国史で迷いましたが、ロシアによるウクライナ侵攻をきっかけにロシア史への関心が高まり、その背景を理解したいという思いから外国史を専攻しました。特に、ロシアが強国になる以前の時代に興味を持ち、教科書であま

り扱われない分野を学びたいと考えました。卒業論文ではロシアとモンゴルの関係をテーマにしています。両国が戦った記録では、ロシア側は自国の奮闘を強調する一方、モンゴル側の文献ではロシアを支配地の一部としてしか扱っていません。こうした歴史認識の違いに興味を持ち、1年次からのこの分野に取り組んできました。4年間を通して関心を深めながら学び続けられたことは、とても充実した楽しい経験でした。



東野 梨歩さん
 歴史学科 外国史専攻 4年
 東京都立文京高等学校 出身

1 Week Schedule

[2年次]後期

	Mon.	Tue.	Wed.	Thu.	Fri.	Sat.
1			外国史学文献史料講読XV		外国史各説XIII	
2	ラテン語	ドイツ語IIb	ロシア語IIb		外国史学文献史料講読IX	
3	ロシア語IIAb		東洋史特講IIIb		ロシア語で学ぶ教養	
4		東洋史特講VB	美術史概説	西洋史学研究法	外国史各説VIII	
5						
6						